

No.	提 案 名	提 案 団 体 名	
		代表者氏名	所 属
1	地域コミュニティ再生への新たな一歩	宇都宮大学 まちづくりラボ	
		赤堀 友一	宇都宮大学 教育学部
		指導教員 氏 名	陣内 雄次

## 【1】. 要旨

### ・問題意識

第三次産業従事者が大部分を占める現在の日本人はその大部分が都市に住んでいる。現在は都市化社会を経て、完全に都市型社会という構造へたどり着いた。

社会構造の変化に伴い、コミュニティのあり方も同様に変容していく。今までの地方公共団体や地縁団体が担ってきた地方自治では、もはや打開できない問題も多い。今こそ従来型の地方自治を改め、新たな可能性を探る時である。

### ・可能性

排他的な側面を持ち合わせていた自治会による地域自治が変容してきたということは、もしかしたらプラスに捉えられるかもしれない。その排他性が低下することによって新住民による新たな活動が行われる。空き家や空き店舗に新住民が住まい、カフェやギャラリーを開くといった例など、地域コミュニティの疲弊による排他性の低下は、新住民移住の間口を広げるといふ副産物を生み出しているのではないだろうか。

そしてその新住民による、つまり『地域的には第三者だったもの』による革新的なイベントやお店などが、地域に今まで無かった活気を与え、人を呼び、新たな『まちづくり』を担っていく要素になりうるのではないか？

### ・施策事業の提案

行き詰った地域自治を打開すべく、アートやカフェがきっかけとなって行われている比較的新しいイベントに注目し、地域に関心が低いとされる若年層と地域コミュニティの接点を模索する。

どこで接点を作るか、イベントと地域との関連性の担保、イベントとしての持続性の担保などにおいて、行政の介入が有効に働く箇所を探し、「民間によるイベント」、「地域」、「行政」の3つの組織による協働をめざす。組織と組織の協働による今までとは違った新たなソーシャルキャピタルの蓄積・活性化という切り口から提案を行う。

## 【2】今回の提案におけるキーワードの説明

### イベント型のコミュニティとは？

何か目的をもって設置し、運営のために人が集まり、そして開催されるイベントには集客性がある。今回とりあげるイベント型コミュニティとは、そういった市民間のイベントが形成するコミュニティのことで、定期的に人が集まり、市民活動を行うある集団のことをさす。今回事例としてとりあげる市民活動であるネコヤド大市や fine field art festival、広く言えば、各地で開催されている地域のお祭りなども、そのもののイベント性が基になるコミュニティである。

このコミュニティには、運営者同士の強い結びつきや、運営者と客との間に形成される弱い結びつき、客と客との間に形成される弱い結びつきなど、そのイベントが形成する人間関係の大部分を含むものとする。そして今回は、なかでもコミュニティの構成員に若者が多い**アート系のイベント**を分析する。

### 今回注目するイベント

事例の分析として、二つのイベントを調査した。ひとつは鹿沼市の根古屋路地で行われている通称「ネコヤド大市」。もう一つは東武線南宇都宮駅周辺で行われている「fine field art festival」。ともにアートやカフェ、雑貨などをテーマにしたイベントである。

両方とも、現在ではそのイベントを行うことで、その街に多数の人が一時的ではあるが訪れる結果となっている。このイベントは、これからその街の活性化を担ってゆく重要な要素になりうるのだろうか？

### なぜイベントに注目するのか？

今回の提案の大きな目的として、地域のソーシャルキャピタルの蓄積があげられる。ソーシャルキャピタルは、コミュニティなどの人間関係の中に蓄えられる目に見えない資本であり、その蓄積のためには「**組織と組織**」という、**コミュニティ同士の係わり合い**が必要である。

#### ソーシャルキャピタルについて

その概念の発展に大きな影響を与えたアメリカの政治学者、ロバート・パットナム (Robert Putnam) によれば「ソーシャルキャピタルとは、社会的な繋がり（ネットワーク）とそこから生まれる規範・信頼であり、共通の目的に向けて効果的に協調行動へと導く社会組織の特徴である」とされる。

内閣府委託調査によるソーシャルキャピタル（以下「SC」という）についての報告書によれば、SCの構成要素として次の大きく三つが挙げられる。

表 1 : ソーシャルキャピタルの構成要素

①つきあい、交流	近隣での付き合いの程度、社会的な交流
②信頼	一般的な人への信頼性、相互信頼、相互扶助
③社会参加	社会活動への参加

・ SC の蓄積が、よいまちをつくる。

SC の蓄積と市民活動の間には正の相関が存在する。市民活動が盛んになれば、人と人とのつきあいが生まれ、それによる信頼が生じる。そして交流や信頼からは社会参加の促進などといった SC の構成要素に正の影響が出る。そして蓄積されていく SC によって、社会参加や交流などが活発化し、それにより市民活動もまた活性化していくのである。

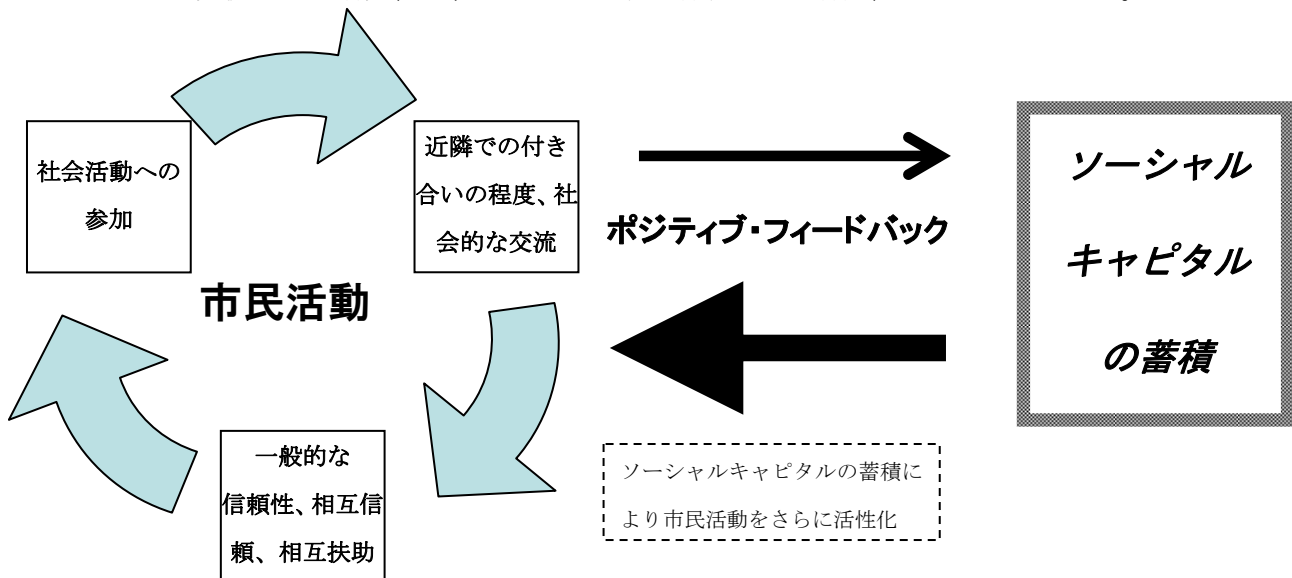


図 1 : 市民活動と SC のポジティブ・フィードバック

さらに、蓄積された SC には相互作用がある。特定のグループに属している個人や団体が、他団体における別の新たな SC の形態を体験し学習する。すると、もと居たグループでの SC をさらに活発化し、発展させることができる。

また、ある市民活動をきっかけに醸成された SC はその後新たな市民活動を生む母体となり、ネットワークを拡大させてゆく。拡大され、個々に確立したネットワークは、SC の相互作用によりお互い醸成され発展してゆくことも期待される。

・ SC の性質

SC は蓄積される場所や組織などにより性格が変わり、次の二つに大別される。

表 2：ソーシャルキャピタルの種類

SC の性格	結合型 SC	橋渡し型 SC
築かれる人間関係の性質	フォーマル	インフォーマル
人間関係の度合い	厚い	薄い
関係の仕方	内部志向	外部志向

(資料)平成14年度内閣府委託調査「ソーシャルキャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」(日本総合研究所)

結合型 SC は、SC のダークサイドである排他性や個人の自由の制限から外部との対立が生まれ、閉鎖的なシステムが社会的な非効率を生み出したりする可能性を内包しており、橋渡し型 SC の蓄積が重要とされる。

### ・イベント型コミュニティとソーシャルキャピタル

今回提案する際調査を行ったイベント「ネコヤド大市」と「fine field art festival」はこれから地域に対してどのような影響を与えるのであろうか。

地域コミュニティの弱体化に関して、SC 蓄積が地縁組織への加入の増加をもたらす可能性を考えてみる。日本総合研究所による調査報告書(平成14年度内閣府委託調査「ソーシャルキャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」)には、「地縁組織は、本来地域における SC 形成のための『家族関係』に次ぐ基本的な単位であり、『顔の見える関係』を担保するには最適の単位でもある」とある。現在の地域には、若者の地域自治への参入など、自治会や地縁型の組織の取り組みでは解決に向けて限界がある問題が少なからず存在し、そこには地域の高齢化、それによる地域自治の行き詰まり、地域に対して無関心な住民の増加といった背景がある。そこで弱体化した地域コミュニティにアート系イベントなどが入り込み、それまで無かった新たな要素を地域に加える事により、今まで自身の地域に関心の無かった住民もすこしずつ目を向けるようになる可能性が生まれてくる。そうすれば、その地域が活性化し、次第に安全や安心など地域を治める上で重要な要素も生まれてくるのではないだろうか。

さらには、失いかけていた地域としてのプライドも、今までとはまた違った新たな形を取り戻せるかもしれない。地縁型コミュニティとはまた別のところで行われる新たなイベント型コミュニティにより、弱体化した地縁型コミュニティが活性化され、新たな SC 蓄積が促されるのである。

アートやカフェをテーマにした若者向けのイベントであることも重要で、地域自治においてフリーライダーとなりやすい若者や新住民が「イベントそのもの、またはアートやカフェの魅力」に触れることによって、自身が住まう地域に対してもっと関心をもてるようになっていけば理想的である。

### 【3】事例分析

今提案では、そのようなイベント型のコミュニティによる新たなSCの蓄積について考察する。しかし、同時にこれから紹介する2件の事例は単にSCの蓄積だけではなく、「住民が様々な体験を通して成長していく場」、「地域の空き家利用の促進」など、様々な効果を波及させていた。この2件の事例からは、今後のまちづくりについてテーマとなりえそうな要素を抽出し、分析を行う。

#### 事例1 ネコヤド大市

調査日時	聞き取り調査対象
2008/8/26,2008/10/16	饗茶庵オーナー風間饗司氏

##### ・概要

鹿沼市で現在一ヶ月に一度開かれているイベント。市役所前の根古屋路地で開催されており、同路地に店を構える饗茶庵というカフェが中心になって開催されている。

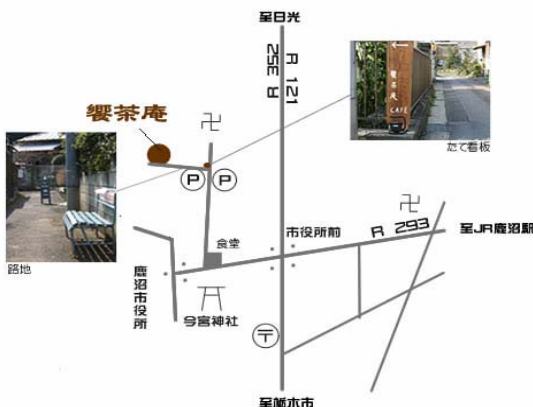


図2 饗茶庵周辺地図

(出典：http://www.kyochaan.com/acc/map/map.html)

毎回数店舗の出店者が集まり、扱う商品の種類も店によって多種多様に異なる。

毎月第一日曜日開催されているこのイベントには、毎回1,000人前後の来客があり、最近では地元からの来客も増えているようである。

開催場所である根古屋路地では、現在ネコヤド大市のきっかけにもなった饗茶庵と、アンリロという飲食店が営業しており、その路地と店舗、そして隣にある空き家のスペースなどを開催地としている。

##### ・地縁組織や市役所などとの関わりあい

このイベントは独立したコミュニティを作り上げているわけではなく、周りを取り巻く様々な組織や人々と関わりあいながら、鹿沼市で活動している。ネコヤド大市を立ち上げるきっかけにもなったカフェ「饗茶庵」のオーナー風間饗司氏からのインタビューからは、自治会や商工会議所、行政などとの関係性をどのようにもっているのかを聞くことが出来た。

- ・市役所に駐車場を借りる。合わせて交通誘導も市役所に依頼。
- ・商工会議所からは、商店街を出店場所として借りたことがある。
- ・老人会からベンチを借りた。
- ・自治会からは、自治会館を出店場所として借りた。

これらは、ネコヤド大市のみのもので用意できるが、ここで周辺組織への依頼を行うこ

とで関係性ができる。なにかの接点を生むことで、そこから互いの活動をより深く知るきっかけが生まれ、前述の SC の相互活性化が、ここで期待されるのである。自治会や行政な



写真1 根古屋路地の入り口  
垂れ幕が用意されていた。  
(筆者撮影、2008/10/5)

ども、何らかの形でネコヤド大市に関わることに  
より、少なからず影響を受けるはずである。空き  
家を利用した空間づくり、小さな路地を利用した  
フリーマーケットに似たイベントに、毎月約1,000  
人もの客が訪れる光景、民間の活力・・・自治会  
や行政には無い全く新しいまちづくりの視点が、  
このイベントには数多く存在するのではないだろ  
うか。

#### ・市民育ちの場

ネコヤド大市は「市民育ち」の場でもある。地域のコミュニティに住む人々はお互いに  
関わり合いが非常に少ないことや、コミュニケーションにとっても消極的である傾向がある。  
コミュニティの中で、そういった単にそこに住んでいるだけの「住人」としての位置づけ  
ではなく、コミュニケーションに積極的に関わったり、自分を基軸とするコミュニティを  
生み出したり、そのようなコミュニティの形成に一助をなすような、アクティブな「市民」  
への成長が期待できるのがネコヤド大市である。

#### ・ローリスク、ローリターンで経験を得る

すこし話は変わるが、宇都宮に日代わりでそれぞれのオーナーに店舗を貸すことによっ  
て営業しているコミュニティカフェがある。コミュニティカフェに出店することになった  
人は、店に立ち、飲食物を提供し、売り上げ等の収支を計算し、毎週やりくりする仕組み  
を気軽に経験することが出来る。そしてそこは「市民育ち」の場となる。だがその営業自  
体を本業とし、利益を上げ生活していくという構造は成立しにくい。気軽に出店できるが、  
その分純利益も少ないローリスク・ローリターンの構造。その代わり「実際に営業し、様々  
な人と関わる」というかけがえのない経験を得ることが出来る。

このローリスク・ローリターンの経験を得ることが出来る構造はネコヤド大市にもある。  
空き家を利用した出店スペースには、まるでフリーマーケットのようにずらりと出店者が  
いる。

扱う商品も様々で、パンを売っているところからレザークラフト、アンティーク雑貨ま  
でと幅広い。発表の場を求めていたアーティスト、自分の店を構えることを考えていた人  
たち、ネコヤド大市は、そんな出店希望者のローリスク・ローリターンでの活躍の場とし  
て、また、市民を育てる場としての役割も担っている。





写真2 (左)

出店風景。フリーマーケットのようなスペースはかなりの数のお客さんで賑わう。

写真3 (右)

根古屋路地の風景。

(筆者撮影、2008/10/5)

## 事例2 fine field art festival

調査日時	聞き取り調査対象
2008/10/17	ギャラリー悠日オーナー 柏崎健次氏

“fine field art festival とは、2008.05.31 (土) -06.01 (日) 南宇都宮の大谷石蔵群一帯 (総称を fine field という) で行なわれるアートイベントです。

- ・ fine 優れた、良質の、最高級の、素晴らしい
- ・ find 発見する、探し出す、見つけ出す
- ・ feel ココロと体で感じる

この3つのキーワードが、コンセプトになります。有形無形、ジャンルに関わらずココロに響く作品を募集し、アーティストに発表の場を提供します。”

(以上 fine field ホームページより引用 [http://www.fine-field.com/jp/modules/pico/index.php?content\\_id=4](http://www.fine-field.com/jp/modules/pico/index.php?content_id=4))

fine field とは、上記にもあるように、東武鉄道南宇都宮駅前に鎮座している大谷石でできた蔵の群である。古い蔵をリノベーションし、蔵ならではの非常に広いスペースに絵画作品やオブジェなどの作品、モダンな盆栽などが展示されている。そのほかにもダンススタジオとしての利用、数店舗飲食店も営業しており、非常に多種多様な空間構成になっている。



写真4 展示風景



写真5 出展風景

(出典 : <http://www.fine-field.com/jp/modules/myalbum/viewcat.php?num=150&cid=4>)

こちらでも、事例1と同様、様々な種類の出展がある。雑貨もあれば、似顔絵によるパフォーマンス、絵画の展示など、事例1よりも「アート」に比重があるイベントとなっていた。

### ・場所の利用

蔵の群である fine field は「場」の利用に関して、非常に興味深い活動を行っている一帯だ。それまでは倉庫として用いられていた一見殺風景な大谷石の蔵の空間を、再構築し様々な活動を行う場として開放した。ギャラリー悠日オーナーの柏崎氏へのインタビューの最中も、この蔵を使って「語り部」をやりたいという婦人方が来訪し、空間の提供を交渉していた。

## 二つのイベントの共通点

- ・非常に多くの集客に成功していること。
- ・行政、自治会などの従来まちづくりを担ってきた組織との接点がない。
- ・空き空間を積極的に利用し、リノベーションを図っていること。

以上の分析を元に、イベントが地域に対して何が出来るのかを検討し、さらに、行政の参画を考慮に入れながら提案を行っていく。

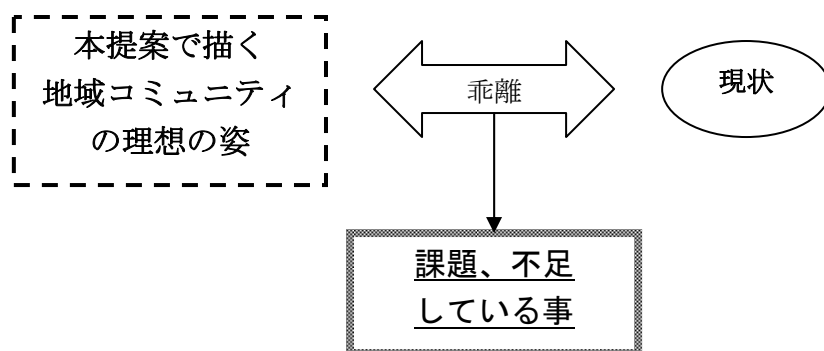


図3 現状と課題

本提案の目標でもある「地域コミュニティにおける新たなSCの蓄積、活性化」へむけての理想的な動きとしては、イベント型コミュニティと地縁組織との協働によるまちづくりが、継続的に、かつ盛んに行われる事である。

ネコヤド大市においては、何例か地縁組織や行政との協働が見られる。この協働を拡大してゆけば、互いの組織がもつSCの活性化が期待できる。ネコヤド大市の活動には、理想的な協働への第一歩として、大きなヒントがある。そのような協働へ向けての理想的な関係を持続可能なものにするために、そしてさらに拡大していくために、中立な立場としての行政ができることとは一体何だろうか。



## 【4】施策事業の提案

「イベント型コミュニティと地縁団体の協働による地域における若年層を中心とした新たなSCの蓄積及び活性化。」

### その1. イベントと地域の接点を設ける

**イベントと地域の接点を作り出すことにより、目標となる新たなSCの蓄積、活性化を促す**

事例などのアート系のイベントは、民間で運営されているために、なかなか自治会などの地縁団体と結びつきにくい。ネコヤド大市のように、意識的にそういった関わりをもつような志向があれば接点は生まれるが、やはりなかなか生まれにくいのが現状だろう。そこで、**イベントと地域の間**に、**中立な立場である行政が入り込み、「協働」の提案を行うことで接点**が生まれる。その協働は、例えば**イベントと、地域のお祭りのコラボレーション**など、同日に近い場所で開催し、回遊・交流をつくれるようにしたり、片方のイベントの開催時に、他方の情報を紹介するなどの便宜を図る。

### その2. コーディネーターの育成

**イベントと地域の間に入り、関係を取り持つ人材＝コーディネーターを育成する**

イベントがその地域と関わりを持つていくためには、**イベントの運営に携わる人間のうち誰かが実際にその地域に住んでおり**、自治会や商工会議所への加入等をしている必要がある。イベントの構成員の中に地域住民がいることで、そのコーディネーターを通して地域からのイベントに対する信頼や一体感、やる気なども向上することが期待される。

**どのように育成するのか？**

まずは、コーディネーター自身が地域に定住し生活していくために、そこで営業可能な職業を持つことが重要である。カフェ、ギャラリー、そのほか飲食店など、形態は様々でよい。**その地域に住み営業する**という点が、自治会などの地縁組織と関わる上で非常に重

要となる。そのために、そういった開業希望者には**行政から職業体験、インターンシップを斡旋する。**

### **地域、イベントをつなぐコーディネーターとして育成**

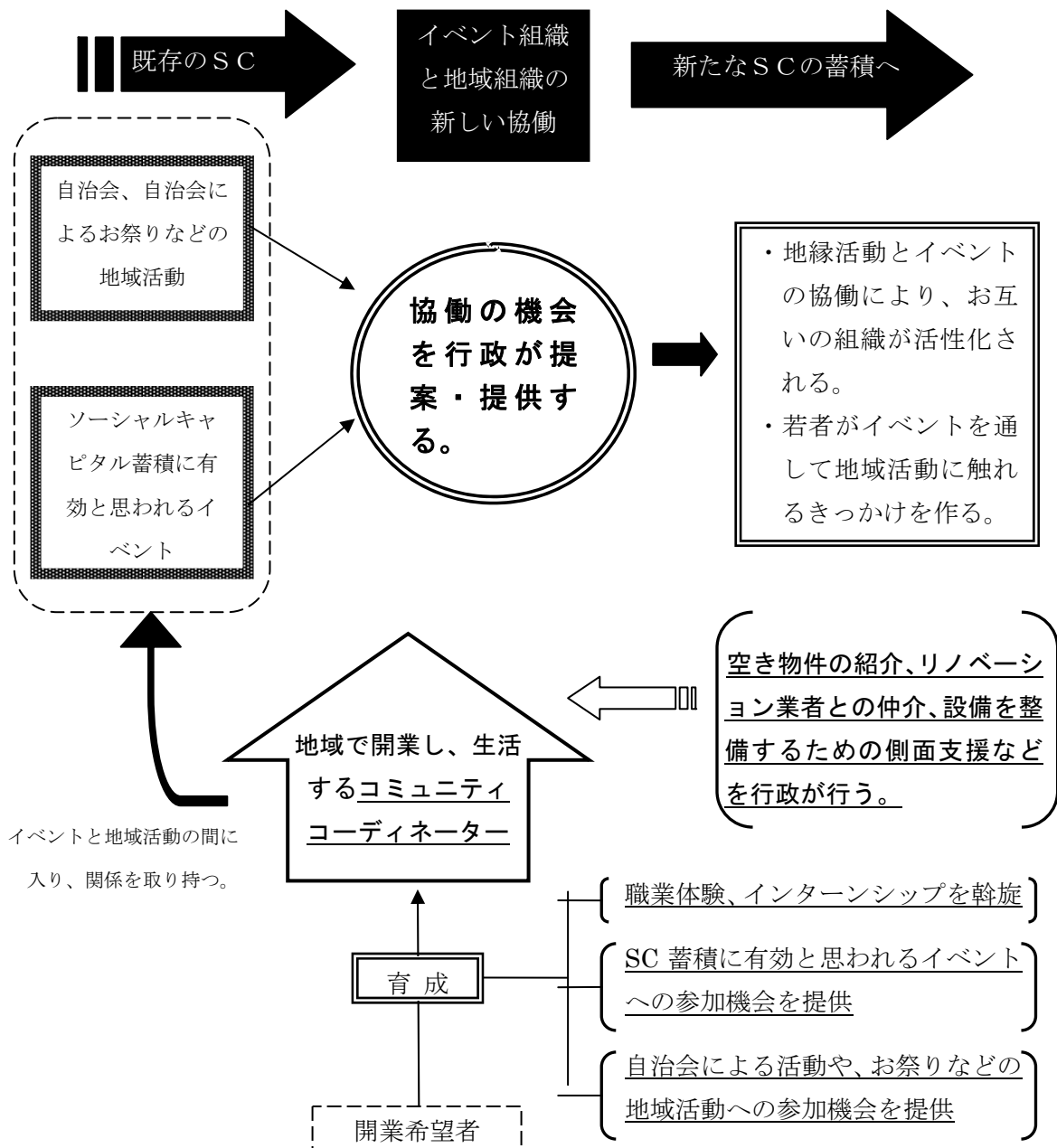
職業体験と平行して、開店希望者には**今回分析した事例イベントやそのほかの「SC蓄積に有効と思われるような市民活動」に、積極的に参加してもらう。**それに加え、自身が出店する予定の地域での、**自治会などの地縁組織や、その組織による活動（お祭りや防災などの地域活動など）にも同じく参加してもらう。**

「イベント」と「地域活動」の両者に参加してもらうことで、両者の特性を学び、コーディネーターとしての広い視野を育てることができる。参加の機会は、開業希望者と地域とのマッチングを行ったうえで、**行政側が提供するとスムーズであろう。**こうして育成されたコーディネーターは、**行政によりコーディネーターを必要としている地域とマッチングされ、その地域で営業を開始する。**

以上の、コーディネーター育成というソフト面の支援を行政が行う。

## **その3. コーディネーターへの支援**

育成され、地域での営業を開始するコーディネーターには、行政からの支援が行われる。**地域で営業を行う上で必要になる「店舗」や「設備」などを、行政が側面支援するのである。**とくに今回のようなイベントに携わっていくことになるだろうコーディネーターの職種は、カフェであったり、ギャラリーであったり、飲食店であったりと、店舗を改装して利用する場合が多い。そこで、リノベーションを専門とする**民間企業・事務所に行政経由で依頼**を行ったり、不動産を借りる際、**業者と開業希望者の間に行政が入り、開業希望者の手助けを行う**などの支援を行う。個人で物件を借り、改装を行い、営業するに至るよりは、信用・信頼の獲得という面で行政が支援することは非常に有効に働くであろう。さらに、**ハード面の側面支援を行政が行う。**



**参考文献・参考ホームページ**

- ・平成 14 年度内閣府委託調査「ソーシャルキャピタル:豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」(日本総合研究所)
- ・山崎 丈夫:『地域コミュニティ論—地域住民自治組織と NPO、行政の協働』自治体研究社、2003 年 4 月
- ・田中康裕、鈴木毅、松原茂樹、奥俊信、木田道弘:「コミュニティ・カフェにおける「開かれ」に関する考察」日本建築学会計画系論文集第 614 号、2007 年 4 月
- ・金谷信子:「市民社会とソーシャルキャピタル:地“縁”“がつむぐ信頼についての一考察」、コミュニティ政策学会編『コミュニティ政策 6』東信堂、124-143、2008 年 7 月
- ・陣内雄次、荻野夏子、田村大作:『コミュニティ・カフェと市民育ち:あなたにもできる地域の縁側作り』萌文堂、2007 年 9 月
- ・fine field : <http://www.fine-field.com/jp/>
- ・饗茶庵 : <http://www.kyochoan.com/>      ・ネコヤド大市 : <http://ameblo.jp/nekoya-do/>